練馬郷土史研究会会報
第397号

7月例会

7月26日(土) 午後2時

会場：生涯学習センター
豊玉北6-9 電話03-3991-1667

講演：「鎌倉御家人・土肥実平の真実」

講師：伊藤一美氏
（会員・鎌倉考古学研究会理事）

参加費：300円

源平合戦で源義経とともに活躍した
土肥実平を取り上げます
お誘いあわせご参加ください

平塚城と飛鳥山周辺歴史散歩

葛城 明彦

①蝉坂

伝・平塚城址脇にある坂道で、人工的な切り通しとも考えられるが起源は不明。『新編武蔵風土記稿』にも描かれており、坂の名は道灌が攻め上った「攻め坂」から転訛したもの、との伝承が残されている（『新編武蔵風土記稿』『東京府志料』）。そのほか、「二町ばかり東」、または現在の農林水産政策研究所内には「勝坂」と呼ばれる坂があって、地元では「道灌は蝉坂から攻め上って勝坂より凱旋した」との話が語られていたという（高橋源一郎『武蔵野歴史地理』）。また、周辺にはかつて「角櫓（すみやぐら）」「外輪橋（そとわばし）」など、城に関連するような小名もあったと伝えられている。

②平塚神社（推定・平塚城址）・甲冑塚

11世紀頃、付近に土着した秩父平氏の一流・豊島一族の推定初期本拠地。遺構は現存していないが、東側に低地を望む舌状台地上にあって、防御のための立地条件は備わった地となっている。縁起には「近き頃まで城かまへの跡あり、土居堀など残りけるを田畠の為めに失いぬ」とあるほか、『武蔵野』（第十一巻第二号）には「神社の欅並木のある参道は、その昔土囲と空濠があったのをならしたのである」と記されているが、『新編武蔵風土記稿』では、「（平塚城跡は）今其所在定かならず、城官寺の辺とも、又西ヶ原御殿山ともいへど、皆正き証なし」となっており、江戸期にすでに城跡が不明となっていたことは明らかである。近年の発掘調査の結果では、神社より本郷通りを隔てた南西側向かいから、14世紀代のものと思われる幅20メートル以上の切岸（虎口形態をとる）・径8メートルの井戸・道路状遺構・土間状遺構・区画溝・柵列の跡や墓壙群（15世紀後半）などが発見され、多数の人骨・馬骨・24点の板碑・宝篋印塔・五輪塔・瀬戸や美濃、常滑など陶器類・カワラケ・銭貨・和鏡・鉄製杏葉（てつせいぎょうようぐつわ）などが出土した。七社神社近辺からも遺構が検出されたことなどから（※「七社神社前遺跡」「七社神社裏遺跡」の項参照）、城は現在の「大蔵省印刷局滝野川工場」を中心とする東西 450メートル ×南北 250メートル～350メートルの地域にあった、とする説が有力である。しかし、1478（文明 10）年に、豊島勘解由左衛門尉（江戸期の系図では「泰経」とされる）が新たに「平塚の対城」を築いたとの記述（『太田道灌状』）があることや、余りにも面積が広大過ぎることなどから、一部史家の間では「末期の城は初期の城とは別個に（七社神社付近に）築かれたものではないか」との説も唱えられている。初期の城主は「豊島太郎近義」とされ、縁起によれば前九年の役後（1062年）には八幡太郎義家と加茂次郎源義綱兄弟、後三年の役後（1087年）には義家と新羅三郎源義光（しんらさぶろうみなもとのよしみつ）が館に立ち寄っており、後者の際には義家から行基作の十一面観音像と鎧一両の下賜があったという。豊島氏は元永年間（1118～1119年）にこの鎧を埋め塚を築いたとされ、これが今も神社社殿背後に残る「甲冑塚」であると伝えられている。また、この塚が高くなく平らであったので「平塚」の地名が生まれたという（塚自体は銀環の出土があったと言われており、それ以前の古墳である可能性が高い）。豊島氏が義家、義綱、義光の徳を慕って三人の宿泊の地に社を営み、影像を奉祀したことがこの神社の始まりとされ、このことから社は昔「平塚三所大明神」と呼ばれていた。甲冑の下賜は単なる伝説であったとしても、当時の奥州に通ずる道筋（鎌倉街道中ツ道沿い）に館があったことからなど推測すれば、三人の宿

高札場

・三月例会　三月二十七日(木)
東京二十三区を歩く(7)
板橋区　板橋宿

大河勝正委員の案内で好天の埼京線板橋駅滝野川口から近藤勇と新選組隊士供養塔へ。新撰組局長近藤勇はこの板橋平尾宿の処刑所で斬られた。供養塔はその後旧隊士永倉新八の発願で建てられ、毎年四月二十五日に近い日曜日に「墓前供養祭」が行われる。

続いて東光寺，宇喜多秀家の供養塔がある。秀家は関ヶ原で敗れ八丈島に流刑され死んだが、子孫が明治になって赦免され、この寺に供養塔を建てた。板橋には秀家の妻の実家である加賀前田家の広大な下屋敷がある。

勘明寺、平尾宿脇本陣跡、遍照寺をまわって板橋宿本陣跡、板橋宿は江戸から10キロと近く宿泊でなく休憩場所として多く利用された。本陣の飯田家は皇女和宮が降嫁の際宿泊した。

続いて脇本陣跡から文珠院、遊女の墓、飯田静の墓碑を見て板橋へ。地名の由来となった橋で、頼朝や義経もこの地に陣を構えたという。江戸時代以降は中山道が石神井川にかかる太鼓橋で何度か架け替えられ、現在の橋は昭和初期のもの。続いて縁切榎、旗本近藤貞用の屋敷にあった榎と槻が中山道から見え、榎が「えんの木」と「つき」で「縁の尽き」「縁切り」として嫌われた。現在の木は三代目という。皇女和宮降嫁の際は薦をかぶせて見えないようにした、という。

以上板橋宿一巡り。かなりの距離があり好天で暑かったが地元在住の葛城明彦氏の随時の解説も面白く、有意義な半日であった。昼過ぎ地下鉄三田線板橋本町駅付近で解散。＊次頁下段に続く